

## 農業環境技術研究所案内（１１）：古書 その２ 農家益（のうかえき）・書言故事（しょげんこじ）

「[情報：農業と環境No. 40](#)」では、当所に保存されている古書を数多く紹介し、その中のいくつかについて簡単な解説をした。今回は、「古書 その２」と題して、さらにふたつの古書を紹介する。

### 農家益（のうかえき）

次の５冊が保存されている。

- 1) 農家益：天・地・人、大蔵永常、享和２年（１８０２）
- 2) 農家益：後編、乾坤、大蔵永常、文化７年（１８１０）
- 3) 農家益：續編、乾坤、大蔵永常、嘉永７年（１８５４）

著者の大蔵永常は、宮崎安貞、佐藤信淵とともに江戸時代の三大農学者の一人に数えられている。明和５年（１７６８）に日田郡隈町（大分県日田市隈２丁目）に生まれ、安政７年（万延元年：１８６０）に江戸で没した。行年９３。遺髪が願正寺（日田市亀山町）に埋葬された。法名は釈大海信士である。通称は、幼いとき亀太郎、長じて徳兵衛、喜内。字は猛純。亀翁、愛知園主人、黄葉園主人と号した。あるときは、日田喜太夫とも称した。３５歳になって、大蔵氏の家の字である永を用いて永常と名乗った。

大蔵永常は、「農」に執念を燃やした男で、享和２年（１８０２）に苦心の作品「農家益」３巻を刊行した。永常３５歳のときである。為政者に副業の利を説き、櫛（はぜ）の栽培や製蠟（ろう）について力説した。永常は農学者として有名になったが、勉学の必要を感じ、大坂にいた蘭学者橋本宗吉について植物学や生理学などを学んだ。

オランダから輸入された顕微鏡を使って、稲の花弁を調べ、雌しべ雄しべのあることを知り、その著作の中で、植物の雌雄について正しい知識を紹介した。また西洋の化学知識を基にして、肥料について科学的に解説した「農家肥培論」の再版と、「農家益後編」、「豊稼録」を刊行した。

永常の著作は５７年間に３５種にのぼる。文章は平易で、多くのさし絵があり、内容が科学的であるといわれる。異彩を放つ著書は、「農具便利論」であり、彼の著作の集大成は「広益国産考」である。本書は彼の処女出版で、ハゼの木を栽培し、その実から蠟燭（ろうそく）を製造する方法が記さ

れている。

### 書言故事（しょげんこじ）

次の12巻が所蔵されている。

漢書：書言故事、巻之1～12、附目録、胡繼宗集・陳玩直解、天順8年（1458）4冊（1帙）、和装本

本書は中国の類書である。古来の有名な故事成語を集め、その目を十二支に分類し、出典を示し解釈を加えたものである。例えば、「白玉楼」とは？ 文人墨客が死後に行くというあの世にある楼閣。  
故事：中国唐代の詩人李賀の臨終の際、天の使いが現れて、天帝が白玉楼を完成させ、李賀を召してその記を書かせることになったと告げた。

人物：李賀（りが）中国の詩人、790～816、福昌昌谷の人。字（あざな）は長吉。表現は奇抜で「鬼才」と呼ばれた。多く、宮廷生活を題材にした。27歳で夭逝（ようせい）した。「昌谷集」がある。